

園の苺夕の籠に摘まれけり

兄は芸術に動く人間としては思ひ及ばない程、親思ひ、弟妹思ひであつた。今は一女の母となつて神戸に住む妹の結婚の時、一つは不遇のどん底に居た事と、一つはそうした儀式ばつた事を好まない所から、私が、病父と兄との代りに帰郷した事があつた。その折私の手にしつかと托して嫁ぐ妹に寄せた一篇の詩があつた。不図した折にそれを読んで、妹に対する愛情の一篇に思ふ様泣かされた事がある。

小さな妹弟には、こまごまと行き届いた注意を常に怠らなかつた。その時の小言も今はなつかしい愛情の言葉となつてしまつた。

私の事はそれとなく、曲水の誌上で文章に托して呉れた。又去年の五月頃であつた。私がある少女雑誌へ書き留めた哀話を集めて出版する事になつた。一纏めにして添削を兄に依頼するとその時だけは小言を言ひながらもやつて呉れた。出版の日を心待ちにしてゐた。父を亡ふ一ヶ月前、初秋の九月、私は小さく貧しいながらも一本の小説集を公にした、私の喜びにかへて兄は欣こんでくれた。その時兄はもう病床に倒れてゐたが、出来上つた臙脂色の絹表紙の美しい本を手にして繰返しあかず眺めてゐた。場合がさうしたにせよ、兄に先立つて一冊の小説集著者となつたと言ふ事が何となく兄にすまないやうにも考へられたし、兄の心を寂しくはせぬかとも案じられた程であつた。

多忙な中を、わざ／＼弟の高校受験のために四国まで行つた事もあつたし、或る一夏を中耳炎のために入院の私と行動を共にして呉れた事もあつた。

すがり出て悲し春の空春の雲

宗教の方面には余り無関心らしかつた。勿論教会の空気は好まなかつた。気の合ふ友達も余り多くなかつた。やうやく親しんだ友達にも、余りの一本気のために裏切られた事もあつた。私の強いためであつたかも知れなかつた。普通の人では感じ得られないデリケートな点に人間の醜さを痛感するやうであつた。

孤独を愛して、文壇の交友はなかつた。秀れた筆や、作品を持ちながら、創作としては一篇も発表はしなかつた。

芸術に共鳴して居た人には、曲水以外に、久保田万太郎氏があつた。泉鏡花氏、芥川龍之介氏、永井荷風氏、鈴木三重吉氏、北原白秋氏、三木露風氏など、それ等の人の作品は可成読破してゐた。これと別な意味で薄田泣菫氏に尊敬を払つてゐた。

曲水の方では、先生を初め交際は広かつたらしい。一時仕事のために曲水から遠ざかつた前迄、先生には大変お世話になつてゐた。殊に曲水が生れる前後にはさうらしく、兄から折々聴かされた。

寒燈吟社の方々の交際は親しいものであつた。病中からは寒燈会の方々のみに交際は狭められた。苔雨さん、樹人さん、よしをさん、摩山水さんの四人の方は、三月頃まで共に作句された。二月頃はまだ病中とは言へ、喜んで苦痛を押して、瘦せた身体をドテラに包んで床の上に起上つて作句に夜を更した。四人の方々は死の前まで見舞つて下さつた。でも折角のお見舞ひも、四月に入つて、兄はやつた姿を苦にして、皆様とも会はなかつた。折角のお見舞ひも徒勞になつたのを私として申訳なく思つて居る。

新しい科学を理解してゐる一方、馬鹿に古い事などを捨てなかつ